View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by KeiO Academic Resource Archive

要　　約

報告番号	甲 (乙) 第　　号	氏　名	木　村　浩　晃

主 論 文 題 名

Pathologic Study of Intracranial Large Artery Atherosclerosis in 7260 Autopsy Cases
（7260剖検例における頭蓋内主幹動脈硬化の病理学的研究）

（内 容 の 要 旨）

頭蓋内主幹動脈の動脈硬化は脳梗塞の主要な原因の一つである。頭蓋内主幹動脈の動脈硬化性変化が年齢や生年によりどのように変化するかは病理学的に十分解明されていない。日本人の連続剖検例において頭蓋内主幹動脈の動脈硬化性変化の年齢、性別、生年による実態を疫学的に検討した。1972年から2014年までの高齢者ブレインバンクに集積されている死亡時年齢50歳以上であった7260例のデータを解析した。動脈硬化の重症度はホルマリン固定後の脳血管の肉眼的観察に基づいて、0＝狭窄なし、0.5＝脂肪線条のみ、1＝50%未満の内腔狭窄、2＝50%以上90%未満の狭窄、3＝90%以上の狭窄、の各段階に分類した。これを各血管の重症度スコアと定義した。この分類法を用いて両側前大脳動脈、中大脳動脈、後大脳動脈、頭蓋内椎骨動脈、および脳底動脈の重症度スコアを求めた。個々の剖検例で各動脈の重症度スコアの総和を動脈硬化スコアと定義した（最小値0、最大値27）。動脈硬化スコアや重症度スコア2か3を有する割合を死亡時年齢ごと（60歳代、70歳代、80歳代、90歳代、100歳代）、性別、生年ごと（1870年台、1880年台、1890年台、…1960年代）、死因が脳卒中であるか否かで比較した。対象となった7260例の内訳は男性3723例、女性3537例であり、死亡時年齢は平均79.5歳、70歳代と80歳代が大部分を占めた。動脈硬化スコアは50歳代で0 [0–2]、60歳代で3 [0.5–7]、70歳代で5 [2–9.5]、80歳代で6.5 [3.5–11.5]、90歳代で7.75 [4–12]、100歳代で8 [5.5–13.5]（中央値 [四分位範囲]）と年齢とともに増加した。少なくとも一血管に重症度スコア2か3を有する割合も年齢とともに増加した。動脈硬化スコアは60歳代では女性より男性の方が高く、80歳代と90歳代では男性より女性の方が高かった。死亡時年齢グループごとで比較すると、60歳代から100歳代において生年が後年になるにつれて動脈硬化スコアは低下した。少なくとも一血管に重症度スコア2か3を有する割合も同様の傾向が認められた。死因が脳卒中であるか否かにかかわらず同様の傾向が認められた。血管ごとの比較では、重症度スコア2か3を有する割合は中大脳動脈が最も高く、脳底動脈、後大脳動脈、椎骨動脈、前大脳動脈の順であり、その差異は生年が後年になるにつれて小さくなった。

以上より頭蓋内主幹動脈の動脈硬化性変化は年齢とともに進行し性差を認めた。また生年が後年になるにつれて動脈硬化性変化は軽減していた。